

小田原史談

第123号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3 2 1



自叙伝

寿昌寺住職
全理事長
荻窪保育園長

大井 諦玄

第十章 福祉事業時代
総世寺先住齊藤老師の未亡人から昭和三十八年十一月廿日に葉書で短歌を頂戴しました、左に記します。

(一)落ちぶれて 袖に涙の かゝるとき

(二)うきことこの なおこの上もつれかし

(三)朝な夕な 香のけむりに すせびつゝ

(四)七十の坂を つらねし 老の身に

かすかにのこる 夢をいできて

私も負けずに返歌を、ものして

返歌(一)あしびきの かなたにいます 総世の

返歌(二)七十の坂を 越ゆるも いさみませ

返歌(三)あすさゆみ 春になりなば 寿昌寺を

とく訪いてまし 昔かたらん

宇宙万物画であり詩であり、思であり、曲である、見聞する人、時により異なる、こゝに絶句あり、如何

一段春光寿昌辺。 一段の春光寿昌のほとり

驚飛魚躍哭蒼天。 驚飛び魚躍り蒼天に哭す

山風海月自作曲。 山風海月自ら曲を成し

妙用縦横古賢。 妙用縦横古賢を学ぶ

昭和四十四年九月十日神奈川県社会福祉協議会より表彰
昭和四十三年八月八日社会福祉法人荻窪保育園の認可
を取得、同年十一月廿四日曹洞宗管長より表彰さる。

私の一男居宅を建立するに当り、地鎮祭をしたその時

一絶を賦し祝語す

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

百難除却祈禱機輪

地鎮場祇禱祭神

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

三下 三回なる

五台山(山西省)代州五台县東北百四十里の所に在り、略して台山と云う山上に五峰あり、頂上は台状をして居るので五台山の名が生れた、西南北五台の内北台が最高、山中に百ヶ寺といわれ、至る所に寺がある通説

打懐裏 前の胸の外を打つ

五台山の祇魔窟は馬祖道一禪師の法系で、永泰湍禪和尚の弟子である、常に一木叉を持つて修業僧が来て、礼拝するのを見て頭を打って曰く、おまえを惑わす悪霊がおまえを行脚させた、この悪霊が、おまえを出家させた、と修業僧を究極の処に追いつめ、この究極の処を出家し行脚しなくてはならぬことを示す、この木又下に追いつめた処は言語道断の絶対境で、そこで凡夫は死んで仏がある、その処を一言い得るも仏で、昭和三十九年九月十日神奈川県社会福祉協議会より表彰される。

昭和三十九年六月五日県保育会長より表彰
元旦偶吟
東君布令万家春。天朗気澄澄柳色新。無我保育誰不賞。誰玄順事誰精神。註東君太陽神の名、春の神

又
耕雲六十有八年。人生行程幾變遷。婦女病吾非極感。寿杯琴鼓詩酒筵。耕雲雲を耕やすで毎日清らかな生活 幾變遷 学校の先生、古物商、軍人として召集敵を殺傷する商売、僧侶等

又
婦女妻女のこと 寿杯 琴を打ちて歌う 琴鼓 琴をし太鼓を打ちて歌う 筵 宴と同じ、さかもりの宴 古稀自寿 古稀自ら寿ぐ 仏飯活食七十年。山利送窮無物纏。山利窮を送るも物に纏ること無し

浮世光陰還自愧。悠々たる野雀幽研を発す 註山利 刹は寺院の建物、山利は寺院 悠々たるのんびりして自適のさま 野雀 野に在る雀 幽研 興ゆかしい和かなさま

台鴻の人、名は素人、私をよくし邦人と異なる所なしと親交あり、私に三首の絶句を送る、多才薄覽、文筆に記す

無松無酒迎新年。 松無く酒無し新年を迎う 陋庵旧態尚依然。 陋庵旧態尚依然 本是自適紙衣身。 本是自適紙衣の身 孤吟長嘯蒼海辺。 孤り吟じ長嘯す蒼海の辺 註迎ムカウと訓む、迎と同意、玉篇大辭典にない 新聞雑紙戯曲等に用ゆる新字ならん

陋庵 〓みそぼらしい家屋 自適 〓雑事にまもらず和かな生活 紙衣 〓紙で作った衣服、死者させる衣服、冥衣とも云う、支那で下層階級では綿衣絹衣は許されなかつたことから下層階級の民衆の意

又
天晴海靖暖日遲。天晴れ海靖く暖日遅し 不聞国内患災異。聞かず国内災異を患うを 但疑未だ梅花報。但疑う未だ梅花の報有らざるを 紙衣快中閑時。紙衣快中閑時を楽しむ

註第四句 〓素人氏は高等学校、中学生の家庭教師(塾)を開いて居られ大層忙しい様子、然しその間閑あつた。

又
鐘仄天静年更新。鐘仄天静かに年更に新なり 菴中般若湯未足。菴中般若湯未だ尽きず 禪門揮毫独尊仏。禪門の揮毫独尊の仏 願作晴耕雨説人。願くは晴耕雨説の人と作らん 註十 〓やみと訓ず字典になし意、酒は智慧を生ずる 般若湯 般若若は梵語智慧と云う意、酒は智慧を生ずる水、故に智水とも云う禪門では般若湯を酒の意

第三句 〓私上手でないが何か書いて床の間に飾つてあるを見て作詩したもの 晴耕雨説 〓晴天の時は外へ出て仕事をし雨天になれば勉強し時を無駄にせぬ語句

次に記すは漢詩の規則を一起承転結の韻を踏んで居る踏まないつまり二四不同、ないが面白いから特に記す二六対、平三連、八三連、ことにしよう。

弄数詞 一去二三里 一たび行くに二三里も行かねば家はない 煙村四五家 そここ田舎の家が四五家あつた 樓台六七座 うてなが六七軒あつた 八九十枝花 そここは誠に桃花源の様に八九十枝の花が咲いていた

又
一片一片又一片 一片一片又一片 二片三片四五片 二片三片四五片 六七八九十片 六七八九十片 飛入荻水成小船 飛んで荻水に入りて小船と成る 註 〓比詩は花卉がちら／＼散つて荻窪川(荻水)に入つて小船となる情景

次に弄姓名と題し起承転結の四句の第一字目に大井諱を配した絶句

弄姓名 姓名を弄ぶ 大道安然歎思量 大道安然として思量に歎し 井中弄月弄昌坊 井中月を弄ぶ弄昌昌の坊 諱心索逕々遙遠 心を諱め逕を索む逕遙に遠し 玄覺春風荻郷に入る 玄覺春風荻郷に入る

註大道 〓印度、支那、日本に伝来した大きな仏道 安然 〓安らかに欠くる処なし 歎思量 〓非思量即ち坐禪の要術 井中 〓私若輩の頃弄昌昌寺に井戸があつて月が映え渡つた事を思出し承句とした 索逕 〓一詩に同字を用ゐるを禁ぜらる、よつて逕を用いた逕は音けい小路 玄覺 〓玄々微妙の覺の境 荻郷 〓荻窪の里

この詩は前述の二詩とは異り韻を踏み二四不同、二六対、平三連、仄三連の規則にも契つて居ります

穴部用水

星野幸一

穴部用水は狩川の飯田岡橋から約百米下流の取水口より山王川の新幹線並に東海道線が1ド下に設けられた揚げ前までの前長約四軒にわたる甲水である。水路は飯田岡の取水口から直線で穴部坂に向い、ここから多古山の突端までは山裾を掘り割り内多古、井細田、池上、寺町の平地部では足柄往還(甲州街道)に並行して流れていた。往還の穴部坂を下ると間もなく大雄山線の踏切に差しかゝるが手前の山裾に沿って暫くゆくと水路は導水坑を掘って坂下部落に抜き、妙泉堰として坂下、井細田、

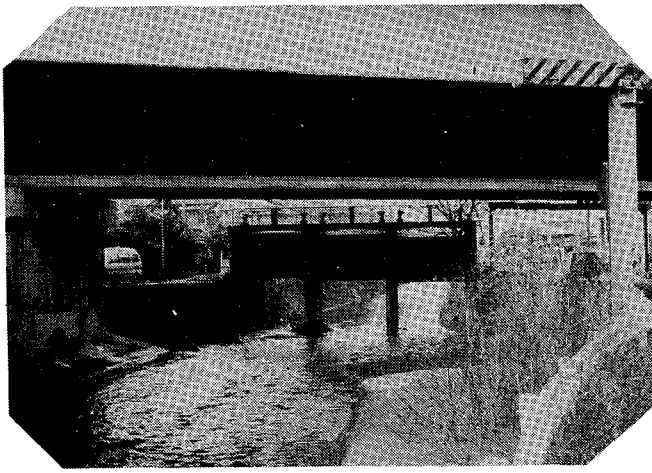
池上、寺町地区にも分流したのである。開削以来百三十年穴部用水は灌漑の動脈として毛細管のような枝をひろげ足柄村(久野及び富水の狩川左岸地区を除く)の水田をうるおしてきた。用水の開削は嘉永年間(一八四八年—一八五三年)と言われ明治維新からさかのぼると二十年の昔であり日本の近海ではアメリカやフランス、イギリス、ロシア、オランダ等の黒船が来航して国交を求めた時代である。酒匂川平野では宝永山の噴火降灰(一七〇七年)の

被害は永く消えることもなく河床が上ったため台風シーズンの度重なる出水や冷氣、長雨等の異常気象により農民はしばしば飢饉と荒地化の二重苦に悩まされてきたのである。米作一本の農業では一たび天災に遭えば年貢収量もなく収入の道は閉ざされたので小田原藩の財政は窮乏し救済能力もまなかなかつたのである。このような土壌の中から二宮金次郎翁(一七八七年—一八五六年)の一村仕法は生れ荒地の開墾や用水を整備する等農村再建の努力がはらわれてきた。何れにしても用水は地先農民の涙と血と汗の結晶であり工事に携った多くの人々の労苦を忘れてはならない。用水の開削を土木技術史

からみると事情や背景はそれぞれ異なるが玉川上水(一六五三年)の高低差ある土地の水路確定では玉川庄右エ門、清右エ門兄弟によって夜間の提灯測量と方法が既に考案されて居り近郷の深良甲水(一六六六年)瀬戸堰(一七八三年)荻窪堰(一七八二年)等の前例もありかなりの進歩があったのではなからうか。幕末から明治、大正、昭和にかけて地区の農業を支えてきた用水も大正末期から昭和の初期にかけて水路に変化が生じたのである。大震災後の大正十三年には久野川、山王川の耕地整理が行われた下井細田、池上寺町地区の水路は下井細田で新水路に切り替えとなり寺町にあった神保の揚げ

前も現在の位置に移された。続いて昭和八年には内多古から井細田にかけて足柄往還に並行した用水は道路拡張のため埋め立てとなり代替水路は小田原市消防北分署前から往還の東側を迂回水田地帯を縦断して山王川に流入したのである。この年、暮の十二月二十三日には皇太子明仁親王が御生れになったのである。現在の扇町の町並みは昭和初期の穴部用水変遷以後に形成されたものであり私たちが足柄尋常高等小学校に通っていた頃の農村風景には懐かしい数々の思い出が残されている。井細田通りは家の前を用水が流れていた。川幅は四乃至五米はあったろうか水がきれいで川底が良くみえ

た。未だ周囲には水田が広がり農村の風趣であった。用水は水量も多く川底にはところどころ青い藻がそうめんのように揺れ鮒やワカサギが泳いでいた。また川底には粒子の荒い川砂の堆積があった。この砂は茶褐色でありコンクリートの骨材としては不向きであったが川端に鋤簾で掬いあげ水切の後、バスケで運んでは裏庭の道等に敷き込んだものである。川砂は何故か本川(酒匂川)にはなく支流の狩川から流れこんでいた。当時コスタという自転車が出始め子供たちは練習中よく用水に転落したものである。ブレーキもなければペタルの逆回転もせず乗りにくい自転車であったことを覚えてい



山王川の東海道線は新幹線ガード下に設けられた揚げ前(昭和60. 4. 撮影) 一揚げ前下流の川幅拡がる一



飯泉山勝福寺(飯泉観音)境内の二宮金次郎初発願の像 一6才(A. D. 1803)元服の頃—昭和44. 1. 18. 建立

また子供たちははたらい舟による川下りにも興じたものである。甲水には石橋や土橋や木橋が架けられていたので橋の下を潜りぬける時にはたらいの中に身を屈め、たらいの転覆を防ぐためバランスをとりながら川下りで結構スリルを楽しんだものである。小学校では田植え前に先生の引率で稲の害虫の卵をとる虫取りというのがあった。苗代に入って一米位の

長さの女竹で苗をこいて卵を探しては摘みとるのである。脛に蛭がついて血を吸われたことも度々あった。農家の人々が田回りをする情景や麦踏に小さな桶を小脇に抱え施肥している田園風景をみたのもこの頃である。秋の収穫前には蝗とりもした。

農村での春秋はこのようにして子供たちに自然の息吹を教えてきたのである。沿線の風物としては山裾にみる玉宝寺(五百羅漢)の堂塔や山上の白山神社、水田の向うにみえる八幡神社の森、春には玉宝寺参道の桜並木や妙泉堰からみた久野川畔の桜が生活圏の中に美しい花を咲かせてきたが昭和四十年代には乱脈とも思える開発でその樹姿は消え自然との共存は不可能となつてしまった。

妙泉堰と言えば坂口下の導水坑内で良く遊んだものである。水深は三十糎位であつたらうか薄暗い坑内の壁や岩にぶらさがつている蝙蝠を捕えるのである。頭部はねずみに似て不気味なところもあつたがいたずら盛りの子供たちは上手に捕えたものである。

妙泉堰は耕地整理以前の久野川を箱樋を架けて横切つたが耕地整理以後は西耕地橋のところまで水門から河

床の下に導水坑を掘り地上地区に送水したのである。この水門では傷ましい水難事故のあつたことを覚えていた。川遊びをしていた少年がどうしたのか水門から導水坑内に吸い込まれてしまったのである。知らせを聞いた井細田の消防団が少年救出のため現場に駆けつけたがポンプは二輪の台車の上に本体を載せた腕用ポンプである。塗装は黒ねずみ色で出動には曳き手に押し手、両車輪のあたりに曳き綱をかけての駆け足である。水門の両裾は既に堰止めてあつた。

現場に着くやポンプを台車から卸して団員が交代であつたがホースも細く水を吸い上げる力はマイイチであつた。

ところが当時多古部落では四輪のガソリンポンプ車が導入されて居り手動ではあるがサイレンも装備されていた。塗装も今日の消防車のような赤色であり井細田の黒ねずみ色のポンプに比べると性能的にかんがりの差があつた。

遅れて着いた多古のポンプがエンジンかけるとホースも径が大きくみるみるうちに水を吸いあげていった。消防団員が導水坑内に入つて抱きかゝってきた少年は既に傷ましい姿になつ

ていた。子供たちはこの悲しい事故を眼のあたりにみて水の恐しさを沁々と感じたのである。

昨年は中島地区の農家が穴部用水の水利権を放棄したというが農地の宅地化が進んで水田はごく一部となり水量の嵩揚げをして分水する必要はなくなつたので揚げ前も一、二年の間に解体撤去されるという。

本年三月には山王川の改修工事も完了した。芥子橋は立派に竣工して揚げ前から下流の川幅も拡げ久野川の洪水対策は一段と強化した。

かつての水田地帯はコンクリートで蔽い被され道路が出来て住宅や工場で埋つた。灌漑用水としてスタートした穴部用水としてスタートした穴部用水は本来の任務を終り今日では防火用水や沿線の下水道普及率五十パーセントという環境の中で汚濁された生活排水や工場排水の水路として第二のつとめを果している。



昭和六十年四月

(了)

諸白小路について

難波明

小田原には、昔から七橋八小路と呼ばれる地名があり、小田原町屋の代表的なものの一つと数えられていた。

八小路とは、諸白小路、御厩小路、天神小路、狩野殿小路、千度小路、金笠小路、鍋小路、広小路で、実はその中四つまでは南町にある。

七橋とは、板橋、筋違橋、欄干橋、蹄橋、七枚橋、千貫橋、羊橋となつているが千貫橋と羊橋は場所的に疑わしい。御存知の方は御教示願いたい。

諸白小路に就いて(国道一号线より西海子に南北に通ずる南町2!2!50と南町3!1!57の間を通る小路)。

諸白とは「広辞苑」によれば、「麴も米もよく精白したものを用いて醸した上等の酒」。奈良、大阪府池田などの名産。」となつている。所謂、酒を造る所であり、この事は先学中野敬次郎先生が、いちはやく説かれていた。

静岡県田方郡葦山町に反射炉で有名な江川家の事は、

よく御存知の事と思ひます江川家は、伊豆葦山に住む江戸幕府の世襲代官、太郎左衛門は江戸家歴代当主の通称である。

江戸家は中世以来の名家で清和源氏源経基の孫、宇野頼親を初代とし、初め本拠を大和国奥之御宇野(奈良五条市)においたが、のち九代親信の時に伊豆国八牧郷江川に移つた。その子治長は源頼朝の拳兵を助けて戦功あり、江川荘を安堵された。

家名を江川に改めたのは、室町時代の初め二十一代英信以来のことと伝えられる二十三代英住は北条早雲に従い、これ以降江川家は後北条氏の配下にあつた。その後二十八代英長は小田原陣の時徳川家康に従い、ために慶長元年(一五九六)世襲代官に任用された。明治維新に際しては足柄栗菲山分庁の長となる。

豆州志稿巻の七、異産の項に江川酒、州の豪族江川氏曾て寄法を得て、酒を醸し後北条氏、徳川氏等に献ず之を江川酒と言、後之を止む。とあり、北条早雲は非

常にこれを好んだ事が北条氏係文献に、しばしば出て来る。

江川家研究家の鳥羽山氏はかつて筆者に北条早雲は、小田原に江川氏を住ませたことがあるみだと言われた。江川氏の出身地の大和が日本で有名な諸白の産地である事を思うと、なにか通ずるものがあるよう

諸白小路の近くに七橋の一つ、筋違橋があり、此処に有名な外郎家がある。外郎家は小田原と京都の二流あるが、遠祖は中国浙江省台州府の生れで、元の順帝に仕え、医師と学問に精しいので初め大医院となり、後に礼部員外郎になつたが元朝が明国に滅された時、二君に仕える事を潔よしとしないで、正平二十三年(一三六八)に日本に帰化して九州博多に住み剃髪して陳宗敬と号した中国人であるが、人から姓名を尋ねられると、旧官名を誇つて、陳外郎と名乗つたので、子孫が外郎を姓とするようになったのである。

その後、宗寄―常祐―祖田定治とつづき、兄定治は命

京都の家を弟に譲つて、自らは小田原に下つた。兄の系統が小田原外郎、弟の原系統が京都外郎の二家に分れ

た。

このことは貞享元年（一六八四）黒川道祐の作った、山城国の地誌「雍州地誌」に記載されている。定治は足利將軍義政の命をうけて、大和源氏の家柄である、宇野氏の養子となり、宇野藤右衛門定治と名乗った。永正・年、北条早雲から招きを受け小田原に移った。「北条氏所領役帳」には宇野氏と記してあって、武蔵国入間郡今成郷、同国荏原郡高幡郷、上野国新田郷、同国館林田島郷などを

我が郷土の

我が家の年中行事

(四) 西山鉄太郎

二三、お彼岸

春秋二回の彼岸の行事は大体同じである。お彼岸には前もって墓地の清掃をして置いて、彼岸の入の日に、寺へ米一升持ってお墓参りに行く。大体女や年寄が多かった。

「入りにぼたもち、明だんご、中の中日あづき飯」と言われ、入りの日はぼたもちを作った。彼岸中どの日かにだんごを作って仏さんに供えた。

又祖先の年回がある場合には彼岸に行く様にした。

領して北条家代官として仕えた。（小田原近代百年史）以上の様に外郎氏が大和国大和源氏の宇野氏に養子になった事、しかも江川氏のもの宇野家に、又諸白の特産地たる大和へ、諸白は最初は薬として製法され、両家とも医学と学問に關係する家柄である事、そしてその製法が奇法を得てと言われている事は日本の製法以外であったが等と想像すると興味津々たるものである。

会議を行い甘茶を御馳走になった。中の一人が、子供に大きな瓶を持って貰いに来たが、もう外へ出ると同時に半分程は飲んでしまったと言った。大笑いした。それよりも大笑いなのは住職の話だった。K氏は大瓶を持って一ぱい貰って帰った。が数分もた、ないのに又その大きい空瓶を持って「転んでこぼれてしまったから……」と又貰いに来た。この話では一同腹の皮をよった。

二五 宗我神社小祭

四月十七日は宗我神社の小祭である。神社では儀式が行われ、夜は芝居か神楽が行われた。宗我神社は九月に大祭が行われるが、何時の頃か四月が大祭だったと言ふ。今日では余興は何も行われてない。

戦前は天皇誕生を天長節と言った。明治時代は十一月三日、大正時代は八月三十一日だった。然し当日は直夏で暑いので十月三十一日を天長節祝日と言ひ、儀式が行われた。

大正時代まで我が郷土旧下曾我村は、旧上府中村・旧下府中村・旧豊川村・旧田島村の五ヶ村で学校組合を結成して千代小学校を建

てた。従って大正末期迄は子供等は千代小学校に通学し、生徒数も一千五百名以上だったろうか。

天長節の儀式の後引続いて運動会が行われた。何しろ一千五百名の大きい学校なので各人共団体競技若しくは体操を一回、個人競技一回だけしかやれないのに日足のみじかい秋なので終る頃には太陽は西に落ち、片付け閉会式を終って帰る頃にはすっかり夜になってしまつた。此の時代には、親達の子供の運動会を見に行く等と言う事はとても出来なかつた。若し見に行けた人があつたら、それは学校の近くか或は恵まれた家庭の人だった。

元旦・紀元節・天長節を三大節と言つたが、昭和になつて、明治天皇の誕生日十一月三日を「明治節」として四大節となつた。

四月から五月一日頃迄に幟を立て武者人形をかざる。これを三束又は五束家の軒に入れて入る。何とも言えぬすがくしい清らかな香りがする。

五日には赤飯を作る。始めての男子が生れた家では初節句と言つて、五月になつて五日迄の間に隣組

や親戚を呼んでお祝をした。此の時には大きい幟を作つてあげた。我が家では貧乏のどん底から苦労してはい上つて来た祖父が、ばくちや大酒のみ・魚取りや帆上げの好きなやつにろくな者は居ないと言つて、これ等を極端に嫌つた。子供の頃から何十回も聞いてた私も帆上げは好きになれなかつたが、私の生れた時は当然ながら帆はなく、又私の長男の時にも作らなかつた。

幟はお祭りの時の文字許りのとちがつて、美しい武者絵が書かれてた。例えば賤ヶ岳の七本槍とか神功皇后の三韓出陣の場面等々がいつも美しく画かれ、上部には父母双方の家紋が父方を上に母方のを下に書いてある。その二本の幟の中央にや、ひくい竿には鐘馗像をかゝげた。

新緑の五月の風を受けて幟さをも折れるかと許りに翻えるのぼりは誠に勇ましく、男子の節句には相応しい光景だった。今は残念ながら幟は始んどが内幟で屋外では全くと言う程見られない。鯉のぼりだけが僅かに、その勇壮さを伝える。

端午の節句でも女の子のひなまつりでも、今年生れた子は翌年にお祝をする。昨年の暮に男子なら破魔引、

女子なら羽子板のお祝をやってからにする。此の暮のお祝がないと片祝だと云つて極端に忌んだ。今の若い者は平気で前年の暮に破魔弓等贈らなくても、五月には武者人形を贈つたりする。昔物は余り良い気持はしない。

二八 苗代

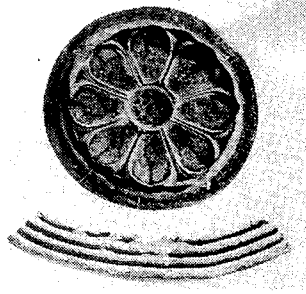
戦前は始んど水苗代だったので、四月中旬に準備にかゝり、四月中には種もみを蒔いた。これを「もみふり」と言ひ、天候その他の関係でおくられても五月五日迄とされた。

もみふりが終るとその祝いに焼きごめを作つた。余つた種もみを煎り釜で煎り、これを水車でつく。別に大豆を煎つて石臼でひき、皮を捨てる。此の両者を混ぜると出来る。このまゝでも食べられるし相当期間貯蔵も出来る。此のまゝ、食べるのはかたいし又老人には無理なので、飯たき釜の上にな丸い早ぶかしを乗せてふかした。一寸こわいがかみしめるととてもうまい。

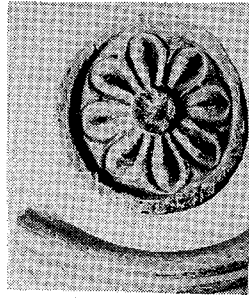
焼き米は苗代田の畦にも紙に包んで供えた。

二九 田植
田植は六月中旬に行われた。農作業は男が主役だが田植だけは女が主役で、男は下働きである。

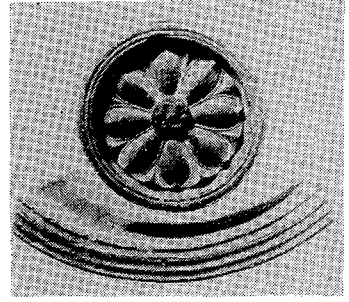
前年の田植えが終ると同時



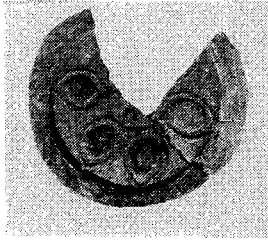
法輪寺 A-1



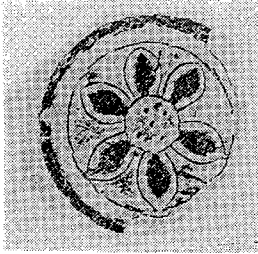
武蔵国分寺 A-2



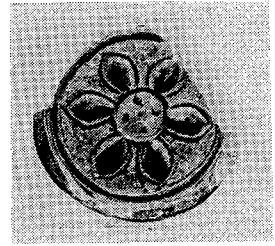
山田寺 A-3



千代廃寺 B-1



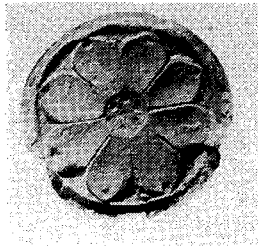
武蔵国分寺 B-2



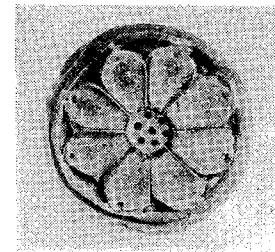
武蔵国分寺 B-3



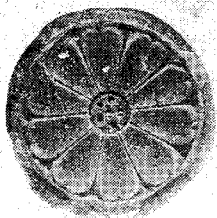
台渡廃寺(茨城) B-4



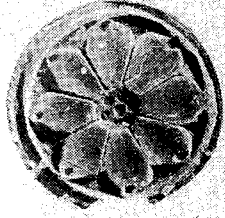
法隆寺 C-3



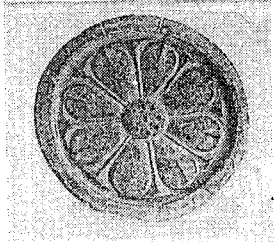
若草伽藍(法隆寺) C-2



飛鳥寺 C-1



四天王寺(大阪) C-4



法輪寺 C-5

に翌年の仕事を頼んで置く。従って、通常各家とも田植の日は毎年決って居り、又台風か余程の豪雨で、もない限り予定通り実施をした。雨だからと言って植えなければ何日になるか判らない。田植の第一日は苗立てと言って、主人夫婦は午前四時頃迄には、もちをつき、船にくるんで重箱に入れ、田植えに来て呉れる人の家と、近隣所の家々に配った。そして五時頃には苗代田へ行って、丁度此の頃迄に来た人々に取る苗の品種を指示する。

苗は今日の田植え女の数に依って一日植立だけの数をとる。そしてお茶にする。今朝ついた餡ころもちが出される。昼食には野菜のにしめを各人毎に皿に沢山よそり、その上に焼き豆腐を切らないまゝ一箇宛のせた。戦前は豆腐は現在の倍以上の大ききで、二つで一丁と言った。焼豆腐も現在の倍以上の大ききだった。当時此の附近では、一日に苗を取って五畝(約五a)植えるのが一人前とされた。私の祖母は早くて、此の田一枚終ったら昼食にすると、六畝の田を午後一時頃には終ってしまった。父の代に家が没落したので数え年六才頃には他家へ子守奉公に行つて苦労したか

ら、何をするにも早く、達者で、寝る時以外はジツとしてる事がなかった。

田植が終わると数日の中に、早苗ぶりと行って、五日飯等を作つて祝う。

三〇 農休みのお神酒

部落中の田植は是非共六月二十日迄に終らねばならない。六月二十一日が国府村の「コーノマチ」で、此のお祭りに行くに夏病にかゝらないと言われた。その為めに部落で田植えを終つて農休みのお神酒を上げねばならない。

二十一日午後天津神社に集まった。酒と肴少々は部落持ち、各人も思いの肴を持参した。

訂正

中野 敬次郎

小田原史談会々報第五三号(昭和四四年一月二〇日発行)掲載の記事「小田原の消防と火災」・故清水専吉郎執筆の内、大正三年十二月四日誓願町杉山清吉出火七戸焼失、とあるは杉山清吉に非ず、杉山安太郎(誓願町)の誤記につき同行は杉山安太郎と訂正します。

千代廃寺古瓦は語る

内田盛雄

千代台廃寺跡出土の鬼瓦と武蔵国分寺跡出土の鬼瓦が同一範であったことは、すでに発表した通りで、その午筆者はさらに千代廃寺出土の六葉単弁蓮莖文鏡瓦真B1(以下六葉単弁瓦と写略す)と武蔵国分寺出土の六葉単弁瓦との類似性から、この一片に秘められた歴史の謎をいっしょか追いつめていた。

そして、わずか一片の古瓦であっても粗末に出来ない貴重な古代遺産であることを、この瓦片は筆者に存分に物語ってくれたのである。そもそもこの瓦は、小泉頼男さんの娘さんが自宅の緑の下から見付て、富田千春先生に届けてくれたもので、そのことを私は神奈川県古瓦展の会場で先生から聞かされたのである。現在この瓦は、市の郷土文化館に展示されております。当時郷土史研究家が千代台にかけた熱意は、それはもう大変なものでありました。当時私の家は学者や、郷土史家の溜り場で連日の様に入れ替り立替りで、ごつた返しておりました。しかしながら今だに千代廃寺に就

ては、どの様な性格の寺であったのか明らかではありません。

今日では、その解明は大変困難なものになってしまいました。と申しますのは台地上は益々宅地化が増え、すでに掘り起された処や、過去に礎石が割られて石垣に使われたりして動いてしまっているなどその全貌がつかみにくくなってしまっていることなどです。

そこで、現在一番確かな形で破片であっても寺院の威容を伝えてくれるのが出土したこれ等の古瓦です。そこで筆者はこの六葉単弁瓦と類似の古瓦を全国の古刹や国分寺瓦等と比較調査をしてみることにした。幸いにも武蔵や茨城に類似のものが見られたのである。

特に武蔵については、鬼瓦と併せて、この六葉単弁鏡瓦の同系と言いか武蔵との共通性があり、地域性からしても、親密な関係にあったのではなからうかと思われるのである。

瓦研究家の厚木の前場先生は、この瓦は、千代台廃寺出土瓦の中で、文様から見た場合最も古い様式の鏡

瓦である。この蓮弁は大邸の慶北大博物館所蔵の蓮珠文の蓮弁の非常に酷似しており、高句麗系に属している鏡瓦である。そして、武蔵国分寺講堂跡からもこれと文様が類似した鏡瓦が出土していると、言っておられる。

瓦の比較と関連性その(一) (写真A1、A3、C1、C5参照) (一)、法輪寺—武蔵国分寺との類似瓦

これ等の原型は奈良飛鳥寺に起因している。但し飛鳥寺の鏡瓦C1は外区は無文で単弁であるが弁先が内欠きになっているのに対し、法輪寺(C1、5)のものは外区は同様無文で単弁であるのは同じであるが、弁先は鈍先の様になっている。この点は、武蔵のものも同様である。

飛鳥寺の瓦は百済の瓦博士宣教師にも負けない意気に燃えて造り上げた我国最古の瓦である。百済の造瓦技術が貴族的な中国南朝よりもたらされた為きわめて雄美である。

武蔵国分寺の瓦がこの様に日本の古代古寺院や、奈良法輪寺の瓦と共通点を持っているのは大変興味深いことである。法輪寺についてお

くと、縁起そのものは定かではないが、推古三十年(二二)に聖徳太子の病氣平癒を祈って山背大兄王と由義(弓削)王が発願したと一説には言われている。(二)武蔵国分寺—千代廃寺茨城との類似瓦 (写真B1、B4、参照)

千代廃寺の鬼瓦と武蔵国分寺の鬼瓦の同筋説は以前筆者が提唱した通りであるが他に先に述べた六葉単弁瓦がある。この瓦は中国北朝様式を受け継いだ高句麗の文様と基本的な面で一一致するが千代廃寺のものは、きわめて高句麗の祖形をなしている。武蔵(B1、3)や茨城(B1、4)のものは直接にその形を伝えるのではなく百済との様式とをどこかで混合消化させて形をととのえた傾向がみられるのである。しかしこれ等は基本的な面では一致している瓦である。

以上の様であるがこれ等に比べると千代廃寺のものも盛りに極めて単純で弁肉も盛りに上りをみせてなく平たく、弁の縁や中房の縁どりを紐状の線で起している所に特色がみられるのである。

武蔵のものもほぼ同様であるが弁の形に、千代(B1)ほど素朴さはなく形を整えており弁肉が盛り上

っている。さらに外区に紐状の環を持っている。周縁は千代同様無文である。茨城(B1、4)の瓦は弁縁を紐状に起しているのではなく逆手法により圧して凹型で溝状に造っておりこの為弁肉はその圧力で盛り上った形になっており外区はいづれも紐状の環を付けている。いづれにしてもこれ等は基本的なデザイン面では一致するものである。

又、武蔵国分寺より出土の瓦当文軒瓦は一〇〇種類以上に昇り、全国でもこれ程瓦当文の豊富な処はないであろう。

そして、(一)でのべた様に武蔵国分寺や、法輪寺、飛鳥寺瓦とも相通する共通点を持つていることに注目しなければならぬのである。

又、茨城県新治廃寺の重弧文軒平瓦や茨城県築波廃寺重弧文軒平瓦と武蔵国分寺軒平瓦同重弧文と松田町の瓦窯跡出土の重弧文軒平瓦の残片も同様である。さらに、新治廃寺の蓮弁鏡瓦といいい重弧文軒平瓦は飛鳥の川原寺の創建瓦ともまことに近似値な図文である。

このことは瓦からみる限り茨城の新治廃寺は、かなり早くから寺院の建設が行なわれていたとみられることとなる。

又茨城県は多量な瓦の出土県であり、その出土地は三十五箇所を越え、出土遺跡の多くは寺院跡や寺院所属の窯跡である。

さてそこで千代廃寺の瓦と武蔵との瓦の共通性や茨城のものもみられる共通性から、武蔵と茨城と当地方との関係が古来に於てあったのではなからうかと言ったことが考えられる。そこでその様な記録や文献がないものであろか調べてみた、先代舊事本記十国造本記に、相武、師長、両国造に次の様に関わっているのがみられる。

相武国造 志賀高穴穂朝武刺国造祖 神伊勢都彦命三世孫弟武彦命定賜国造

相武の国造は武蔵国造の祖とあり神伊勢都彦命三世の孫とある。それでは師長の国造はどうかと言え、師長国造 志賀高穴穂朝御世 茨城国造祖建許呂命児富富意弥命定賜国造が賜った国造であり、茨城国造の祖、建許呂命児が賜った国造であると云う。この様に二

藏、茨城と相こぞって関わり会を持つていたことになつた。さてこのことは何を意味していたことであろうか、私見をのべれば東国の国造がこれら相武、師長の地を掌握してそれ等の国造の祖が子孫にその肥沃な土地を与えていたものとみるべきであろう。

各地に国造を置く様になると中央からの派遣は無く其の他の豪族を以つて之に任じたのであろう。

後大化元年八月の国郡制定により、その後は国造を廢して国司を置くことになつた。

さてそこで大和の畿内を遠く離れた東関東から東北にかけて、何故にこの様な古瓦の寺院が早くから存在したものであろうかと言ふことである。先年鉄剣の出土した埼玉の稲山古墳と共にこの当りを中心とした大きな政治的支配が背後に考えられるのである。

一方日本の政治の流れはどうであつたかと言ふと、大和朝廷は大和地方の古豪族達のゆるやかな連合政権として、スタートするが、しかし、政争と内乱のくり返のうちにその豪族達も次第に淘汰され、やがて天皇のもとに貴族官人として組織されて古代律令国家は完成するのである。古豪族が

次々と消えて行く中で最後に残つた二大豪族が物部氏と蘇我氏であつた。保守派と進歩派を大表する両者は仏教を公認することの正否をめぐつて対立するが、激戦の末物部氏が敗れて脱落して行く尾興の子物部守屋と蘇我稲目の子馬子は武力によつて勝敗を決した。時に五八七年であつた。蘇我氏は天皇家と姻戚關係を結び権力を欲しいままにした聖聰太子などは蘇我馬子の甥にあたり、しかも馬子の娘を夫人としていたのであるから言つてみれば蘇我氏の一族のようなものである。

崇峻天皇に至れば馬子に担がれて天皇になりながら、あげくは馬子に暗殺されている。下手人の東漢直駒は「われ大臣(蘇我馬子)あるを知つて、天皇の尊きを知らず」とまでいきつた。蘇我氏が事実上の天皇の様なものであつた。物部守屋と蘇我馬子の戦いに馬子側に立つた太子は敵を打つことが出来れば四天王のために寺を建てようと言つた。これが現在の大阪の四天王寺と伝えられる。さてそこで、話しは元に戻すが、東国の多賀城や武蔵国分寺瓦に山田寺式の古瓦が使われているところから

も、東国に蘇我氏との関り合ひや、蘇我氏と関つた物部氏の存在がみられるのではたかろうか。

そこで出典からの物部氏を調べてみると、武蔵(橘樹) 物部真根(万葉集卷二〇) 武蔵(荏原) 物部歳徳(万葉集卷二〇) 武蔵(入間) 物部直広成、物部天神社(統紀、神護景雲二、七、壬午) 武蔵(埼玉) 物部刀自売(万葉集卷二〇延喜式)

等がみられる。物部刀自売の歌に色深く背なが衣は染めましを御坂たばらば清かに見む(夫の衣は色濃く染めておけばよかつたなあ足柄山の坂をお通りになつたならば、はつきりと見えるだろうに)と歌つている。平安時代の記録をみると行田市南部には物部の里と言ふ地名があつて、物部と埼玉郡の継がりは大変強力なものがあつた。

平安時代の書物「聖聰太子伝曆」には七世紀前半に物部連兒磨呂と言ふ太子の(從者)がいて后武蔵国造に任命されたのである。「舎人物部連兒磨呂性有道心常に齋食後為優婆塞常待左右癸巳賜武蔵国造而退賜小二位」この人物兒磨呂の本拠をたどつて行くと、原島礼二氏(埼玉大学教授)は、そ

の頃国造にふさわしい地位になつたのは、埼玉古墳群を造り上げた埼玉県行田市の勢力しか考えられないと言つている。又金井塚良一氏(埼玉大講師)も同説を推唱している。これ等諸氏の見解からして、この国造物部連は五世紀の末ごろより急に強大な力を持ち始めたと言つてよい。即ちこの古墳群は六世紀前半の全長「一五メートルの稲山古(鉄剣出土、雄略天皇墓か?)」にはじまり、その中頃から後半に入つた全長一八メートルの二子山を造り出したのである。この勢力と結びつきながら熊谷市南方の大里群の勢力は六世紀に直経九七メートルの大円青山古墳などを築いている。

こうして、彼等は南部蔵の勢力を押えつけ大連の物部氏と結びついて、自づから物部連と名の様に成つたに違ひない。物部氏はこの様に関東地方の動乱にも積極的に介入しながら大連と言ふ地位を獲得したのである。

しかしながら又物部氏の弱点を武蔵や上野のその後の動きは良く示しているのである。両国の豪族達は物部氏の下についていても尚堂々と大古墳を造り上げていた。それだけではない六世紀末

の大連物部守屋の滅亡にたいしては、守屋に味方するどころか、逆に新しい権力者の蘇我氏や聖聰太子に早くも結び付いてしまつたのである。倭王権の支配の下に入りながらもこの様な主体性を貫けたところに西日本とは異つた関東地方の独自性が存在したのである。このように東国の物部氏には畿内と変つて新しい権力

者の蘇我氏や聖聰太子に傾注していった背景があつた。聖聰太子との関わり合ひでは太子の舎人が武蔵の国造に任命されていることでも明かである。

したがって東国の古代寺院の瓦にもそれ等の影響が見られるのもこうした背景からするとうなずけるのである。

大師号について

米神 青王山正寿院

福守 智快

今年には弘法大師千五百五年の御遠忌の年に当ります。真言宗の各寺院があげて、五十年毎のお大師さまの、ご恩に報いる行事を計画する年です。

さて今日、私達は真言宗の宗祖 空海を「お大師さま」「弘法さん」と親しみをこめて呼んでいる。しかし、日本の仏教史上において、大師号をおくられた高僧は二十二人の多きを教える。

- 天台宗 (伝教大師量澄、)
- 慈覚大師円仁、
- 智証大師円珍、
- 慈恵大師良源、
- 聖応大師良念、
- 慈撰大師真盛、
- 慈眼大師天台、
- 真言宗 弘法大師空海、

- 本覚大師益信、
- 理源大師聖室、
- 道興大師実恵、
- 法光大師真雅、
- 興教大師覚鑿、
- 月輪大師俊、
- 承陽大師道元、
- (吉祥山永平寺)
- 常濟大師螢山、
- (諸岳山総持寺)
- 無相大師恵玄、
- 時宗 円照大師一遍、
- 浄土宗 円光大師源空、
- (法然)
- 浄土真宗 見真大師親鸞、
- 恵燈大師兼壽、
- 日蓮宗 立正大師日蓮、
- このうち真言宗の覚鑿一人は自性大師と言ふ大師号も重ねて賜られて居ります。
- 浄土宗の「法然上人」は円